

障がい者の人権について

日本は、平成26年に障害者の権利に関する条約(略称：障害者権利条約)を締結しました。

以前は、障がいとは、病気や外傷などから生じる個人の問題であり、医療を必要とするといった医学モデルの考え方が反映されていました。しかし、障害者権利条約では、障がいとは、主に社会によって作られたもの、社会の問題であるという社会モデルの考え方が反映されています。

学校現場では既に、障がいの有無に関わらず、子どもたちが同じ場所で共に学ぶというインクルーシブ教育が進められています。障がいのある子どもと障がいのない子どもが共に学ぶことで、同じ社会に生きる人間として、互いに正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていく大切さを学ぶこと



ができます。

また、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律(略称：障害者差別解消法)が、昨年4月から施行されました。この法律は、障がいのある人もない人も、互いにその人らしさを認め合いながら、共に生きる社会をつくることを目指しています。

しかし、昨年7月、神奈川県相模原市の障がい者施設津久井やまゆり園で、障がい者19人が殺害され、27人が負傷するという大変痛ましい事件が発生しました。多様性を認めず、生きる意味や人の価値を独善的に判断し、命を平気で奪う身勝手な考えは、断じて許されません。私たちは障がいがあるがなかろうが、同じかけがえのない人間なのです。そして、人間の命を奪う権利など誰にもないのです。

障がいがある人もない人も、互いを認め合い、支え合って生きていく大切さを、私たち一人一人がしっかり考え、あらゆる人が個人として尊重され、排除されない社会の実現を目指していかなければなりません。

コラム

子どもたちが自分らしく暮らせる社会を

「僕な、家族の話になると黙ったり、話を変えようとしてきた。お父さんがおらへんことをどんなふうに思われているんやろって思ったら不安で。でもな気がついたんさ。家族ってお父さんが、お母さんがいて当たり前って思っている人がたくさんいる。そんな周りの見方に僕自身が捉われていたことに。お母さんと二人で暮らしているのが僕の家族。そんな家族のことが僕は好き。これが自分の家族なんやって胸を張って生きていこうと思う。家族っていろんな形があっていい。そんなふうに思える社会をつくっていくんや」

「私の町のことをよくないように言う言葉を聞いたとき、私の心の中が不安でいっぱいになった。でも、私の住んでる町は、自分の子どものように声をかけてくれるおっちゃんやおばちゃんがいっぱいいる。私はそんな自分の住んでいる町が好き。だから、私は、大好きな町のことを隠すような生き方はしやへん」

この子どもたちの声は、社会のありようへの

叫びであり、訴えではないでしょうか。かつて勤務した学校で、担任した子どもたちからこんな言葉を聞いた私は、自分の生き方や考え方を揺さぶられ、自分自身が何に捉われていたのかを見つめ直すきっかけになりました。

子どもたちは、一人一人違う環境の中で育ち、さまざまな経験をしながら生きています。ありのままの姿を受け入れ合う開かれた関係の中では、子どもたちは安心して自分を表現することができます。しかし、本当の思いを出せない環境の中では「自分とは違う自分」を演じなければならず、心を閉ざすしかありません。

そのようなありのままの自分が出せない状況を変えていくために、まずは、私たち一人一人の中にある固定した見方や考え方を絶えず問うことを大切にしていきたいと思いますか。

